

東海大学建築会卒業設計賞 2014

審査評



審査員 井上玄 / GEN INOUE

卒業設計は三年生までの課題とは違う。課題は与えられたテーマに対し、自分なりの提案をするもの。卒業設計はこれに加え、自分でテーマを設定する必要がある。このことを踏まえ、私はテーマ設定や着眼点の面白さと建築的な提案力を KD 賞の評価軸とし、今回の審査に臨んだ。

半田さんの「接地性のある建築」

コルブジェの「ドミノシステム」は、用途や敷地などの諸条件に関係なく適応できる建築的なシステムである。半田さんが取り組んだ多層型ビルディングタイプの提案もまた、汎用性が高いという意味で、システムの提案と同じくらい強度をもった卒業設計の目標設定であり、この点に共感できた。設計の中で設定されていたサテライトキャンパスという用途、青山という敷地は一例として提示されただけで重要ではない。上下階の関係が希薄で、分断されたフロアーが積層した従来のビルディングタイプ——これに対してどのような提案が出来るかが私の評価ポイントであった。半田さんはまず、建築と道の接地性を、人の気配が感じられる街路空間と読み替えて、積層されたフロアーに貫通するかたちで挿入した。その結果、吹き抜けを介し、人の気配が立体的に感じられる断面構成となっている。また、この街路空間が人々の動線やアクティビティーを生み出すことで、道に接していない上層階でも接地性が生まれ、結果的にグラウンドレベルから建築のヒエラルキーが解き放たれた都市像を描くことができている。

三木さんの「町工場を町に近づける」

既存の廃工場に住民利用施設を挿入し、それぞれをブリッジでつなぐ。こうして出来た「町の軸」を町全体の再編のきっかけとする計画。この案の良いところは、工場の空間的特徴である縦方向に開放的な空間を住民が体験出来る断面構成になっていること。ただ単に、廃工場に住民利用施設を挿入するだけでなく、町から工場へ、工場から町へ、廃工場の輪郭を破り、町との接点を増やしていることが評価できる。

野川さんの「長岡駅前大雁木広場」

商店街を活性化するというテーマ設定自体は陳腐ではあるが、この作品の良いところは、提案の幅が広いことだと思う。大手通りという比較的長いエリアに対し、先ず、既存都市の文脈に添った3つのゾーンを設定した。活気を失った商店街に「おもてなし生産拠点」という機能を組み込むだけでなく、一部の店舗のシャッターを取り除くことによって外部化・公共化する提案は、表層的な手法では得られない関係性が生まれる建築的な提案である。既存大手通りの幅を狭め、アーケードの高さを抑え、雁木というヒューマンスケールの部材を連続配置させることもまた、スケールという建築的な提案である。このように都市的なゾーニングから既存商店街との関係性、増築する建築のスケール感に至るまで、幅広く破綻無く提案されていることがこの案の良いところだと思う。